

きた うしろ い せき

北後遺跡 (第3次) 現地説明会

2019. 6. 16 (日)
関市文化財保護センター

北後遺跡は、市平賀地区の区画整理事業に伴い、平成24・25年度に行われた試掘調査で発見された遺跡です。区画整理事業の範囲内において、道路・水路・調整池など工事による掘削が地下深く及ぶ部分に対し試掘調査を行った結果、遺構や遺物が出土し遺跡の可能性が高いと思われる範囲を「北後遺跡」として新しく遺跡登録し、本発掘調査を行ってきました。

第1次本調査	平成25年11月17日～平成26年3月31日	約600㎡調査
第2次本調査	平成26年6月26日～11月12日	1557㎡調査
追加調査	平成29年5月15日～7月11日	155㎡調査
第3次本調査	平成31年4月16日～6月28日(予定)	875㎡調査予定



竪穴建物跡の検出作業

今回の対象地は、調整池を兼ねた公園予定地であり、平成29年度に試掘調査を行った結果、建物跡の一部を複数確認したため、今年度本発掘調査を実施しています。過去の耕地整理や造成工事などで削平されている箇所が多く、遺構の残りは良くありませんでしたが、それでも新たに8軒の竪穴建物跡を確認しました。柱穴やカマドが良好な形で残存しているものは少ないですが、炭や焼土の堆積、須恵器・土師器の出土、貼床の様子などから、いずれも奈良時代～平安時代初め頃の住居跡と思われます。

第1次・第2次調査と合わせて20軒程の竪穴建物跡を確認しており、古代の集落跡の存在が推測されます。貴重な文字資料である墨書土器も多数出土しており、集落の様子や性格を明らかにしていく手がかりになると考えられます。

今後の調査や整理作業、周辺地域の調査にもご期待下さい。

北後遺跡

用語解説



土師器 (はじき)

赤褐色で軟質の土器。粘土ひもを積み、野焼きで焼く日本古来の製法。



須恵器 (すえき)

青灰色で硬質の土器。ロクロで成形し、窯で焼く大陸から伝わった技術。



墨書土器 (ぼくしょどき)

文字や記号・絵などを土師器や須恵器などに墨で書き記したものの。

